

研究プロジェクト

「伝統音楽の記譜法からの創造」

2019年度活動報告

昨年度まで藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）が実施していた「伝統音楽の記譜法からの創造」プロジェクトを今期から引き継いだ。昨年度までは日本の伝統音楽を対象としていたが、今年度は日本伝統音楽に影響がありつつも中国の伝承が本家である古琴を対象とすることにした。

古琴は中国古来の伝統楽器であり、漢民族固有の楽器である。したがって、中国の伝統音楽の中で代表となる楽器・音楽を一種挙げるように言われた場合、それは古琴となると言っても過言ではない。実際、1977年に打ち上げられたポイジャーに搭載された、世界各国の代表的音楽を録音したゴールデンレコードに中国として選択したのは古琴であったし、2008年の北京オリンピックの際、開幕式で演奏されたのも古琴であった。

古琴は西周時代（B.C. 1046-256）にはすでに演奏されていたことが知られており、それ以後廃れることなく現在まで演奏され続けている稀有な楽器である。皇帝の修養の音楽であり、また孔子も演奏したことから儒家が演奏すべき楽器となり、さらに文人が演奏したことから道教的側面も内包した。漢代初期には楽器も現在の形となりその後ほぼ形を変えずに伝承された。

古琴は日本にも伝来し、主に平安時代と江戸時代に演奏されており、その影響は実は多大であったが、現在の日本ではほとんど演奏習慣がなく、またその歴史や音楽、理論等はほとんど知られていない。したがって今年度は、古琴の伝承とその芸術性について、北京在住で中国の国家級非物質文化遺産古琴芸術代表性传承人の呉釗氏にお越しいただき、2019年11月7日（木）正午より、京都市立芸術大学新研究棟2階大会議室にて講演会を実施した。

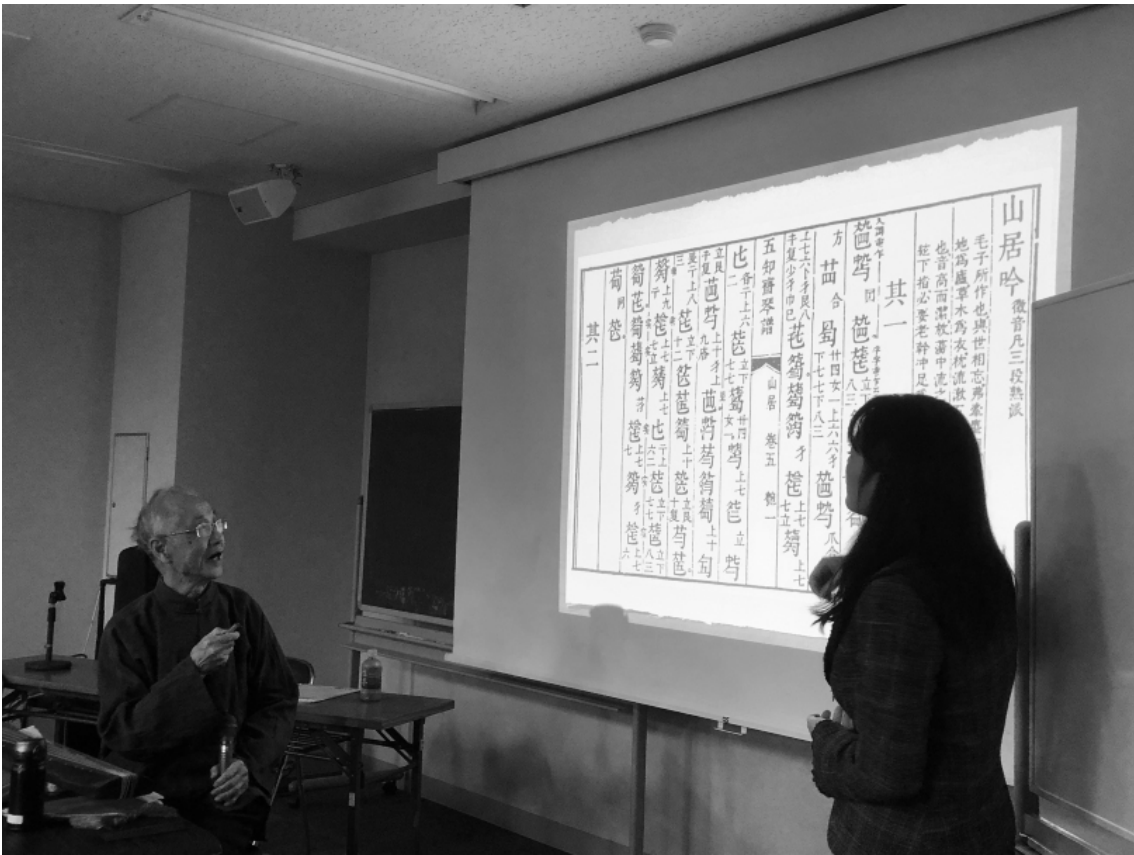
内容は、記譜法の変化について、唐代の琴譜と明代の琴譜の相違、記譜の方法、記譜と実際の音との関係性、記譜と口伝の奏法の相違点、楽器の特性と音など、記譜を軸としながら多岐にわたるものであった。

平日の昼間にも関わらず、多くの来場者に恵まれ、その高い芸術性と精緻な理論、独特な記譜とそれから紡ぎ出される音の世界の特異性について、熱心に耳を傾けられた。質疑応答も積極的に行われ、2時間を超す非常に熱のこもった講演会であった。

来場者は日本のみならず、中国・台湾からも10名を越す方々にお越しいただき、中国社会における古琴への関心の高さも伺うことができた。

古琴の記譜法と伝承法については、まだ多くの事象が存在し、一度では説明しきれなかったため、できれば次年度以降も継続して企画をしていきたいと考える。

武内恵美子（日本伝統音楽研究センター准教授）



講演会の様子（講演：吳釗氏，通訳：方芳氏）